

北宋末の太原戦役の再考

——北宋滅亡の軍事過程について——

鄒 笛

は じ め に

北宋靖康元年（1126）冬、遼を滅ぼした勢いに乗った金軍は、南へ長駆して、宋の首都の開封を陥落させ、その翌年、皇帝の欽宗と太上皇帝の徽宗をはじめとする皇室、及び大臣などを東北へ連行した。「靖康の変」と呼ばれたこの事件は宋代史の分水嶺であるのみならず、その後の時代における北方民族のさらなる南下の発端でもある。

もともと、10～13世紀の東アジア地域の国際環境は、遼や西夏、金などの政権が中原王朝と対等の国として長期的に対峙しており、それまでの時期と異なる多元的な国際秩序が示されていた⁽¹⁾。その新たな国際秩序のもとに、中原王朝である宋は外交的な優位を失い、北方の遼と長年にわたって対峙したが、金の南進を前にして、「靖康の変」により政権は中断した。その後、南宋は政権の再建を成功させたが、失った北方領土の回復は実現できず、「偏安」政権ともされてきた⁽²⁾。かかる背景の中で、「文治国家」である宋の「軍事的軟弱」とのイメージがほぼ定着した⁽³⁾。これまで、宋政権の中断、つまり北宋の滅亡は、宋王朝の政治・軍事制度、ひいてはかかる制度の下にある軍隊の弱体化などの問題に導かれた結果だとされてきた。

膨大な軍隊を持つ宋は「軍事大国」ともされながら⁽⁴⁾、外敵の侵入を前に、わずか1年の抵抗により、簡単に滅亡まで追い詰められた。しかし一方で、北宋が滅亡する直前に国内で起きた方臘の乱の鎮圧や、南宋政権の再建、とりわけ北宋とほぼ同様の国際環境の中での南宋の140年にわたる存続などの現象にまで目を配れば、宋王朝の軍隊は弱体であったという結論は、やはり安易すぎると言わざる

を得ない。度重なる軍事的危機を首尾よく脱してきた北宋が、外部からの侵入を原因として滅亡した経緯、つまりは北宋の滅亡という事件の「軍事過程」を明らかにする必要性が浮かび上がるのである。

現代軍事史分野の中で、軍事力は「自己の意志を敵に強要するための手段として組織的に行使される実力」と定義されており⁽⁵⁾、その実際の担い手である軍隊は、宋代史の場合、陸上で活動する歩兵や騎兵が主力である⁽⁶⁾。本稿では軍事力という語をこのような狭義の意味、つまりは軍隊の戦闘力で用いる。

一方、注意すべきは、西洋軍事史家が分析するように、戦争の結果は軍隊の強弱だけではなく、数多くの流動的な要素に左右されるということである⁽⁷⁾。その流動的な要素として、当時の戦場における実際の状況など、時間的かつ空間的な偶然性も考慮すべきであろうと思われる。これら流動的な要素が、制度などの一般的な要素とともに、軍事活動の結果を導く。しかしながら、国の軍事制度への検討を除けば、軍隊の強弱、すなわち上述の狭義の軍事力に研究が集中し、それ以外の要素にほぼ関心を寄せていないというのが、従来の宋代軍事史研究の現状である⁽⁸⁾。

金の侵入により勃発した宋金戦争において、金の北宋攻略に当たり、河北路に向かう東部戦線、及び河東路に向かう西部戦線という2つの主戦場が形成されたが、金の最終目標は無論、東部戦線の延長線上にある開封である。結果的に、開封が抵抗もむなしく陥落したことにに関して、従来の見解は主に、上述の「軍事的軟弱」という原因以外に、統治者層が政治闘争に耽り、国の危機を顧みなかったことなどを問題視していた⁽⁹⁾。また、戦局面において、河東路の太原で起きた戦役の重要性も強調され、太原の陥落が北宋の滅亡と直接的に関連したということが指摘されている⁽¹⁰⁾。緻密な分析を通じて史実を明らかにしたものの、上述の検討は、それぞれ中央の政治と地方の戦局に個別に注目するのみで、あたかも政局と戦局とは無関係であるかのように記述していた。しかし実際、軍事行動への政治的関与は古今東西を問わず存在し、また、軍事行動の結果が逆に政策決定に影響を及ぼすという点も、決して無視することができな

い。これらの要素を含む経緯こそが、筆者が注目したい「軍事過程」である。

かかる現状を踏まえ、本稿は太原戦役をめぐり考察を行い、太原の戦局のみならず、その戦局に影響を及ぼす様々な要素にも注目し、宋金戦争の発端から北宋の滅亡までの経緯を1つの「軍事過程」として追及しようとする。先行研究が存在しているにもかかわらず、あえて再考を行うのは、太原という一地方で起きた戦役の経緯を、より当時の北宋、ひいては多国関係の実情に即して検討するためである。このような検討は、北宋の滅亡を宋代史の中で如何に位置付けるかに関連し、さらには、「文治国家」であり「軍事大国」でもある宋の特質を認識する新たな視点を提供できよう。

本稿で用いる史料には、正史のほか、『三朝北盟会編』、『大金弔伐録』と『靖康要録』といった編纂史料がある。南宋の徐夢莘による『三朝北盟会編』は、正史に見られない徽宗・欽宗・高宗朝における宋金両国の外交文書や上奏文、碑文、雑著を網羅的に収録し、情報量が多いのみならず、その他の史料の相対化をも可能とする。特筆に値するのは、『三朝北盟会編』は現存量が極めて少ない宋側使者の出使記録を収録し、戦争前後における宋金交渉の詳細を究明する手がかりとなる点である⁽¹¹⁾。一方、『大金弔伐録』は、金天輔7年(1123)より皇統2年(1142)までの金・宋(楚・斉という金による傀儡政権も含む)の間の外交文書を収録する。著者は不明で、内容的にも散逸した部分が多いが、金少英により整理された『大金弔伐録校補』(中華書局、2001年)点校本は、かかる問題を整理し、その利用をより容易にした⁽¹²⁾。その内容は部分的に『三朝北盟会編』所収の外交文書と重なっているものの、他の史料に見当たらない独自の記録も多く、戦争中の宋金交渉を検討する上で、同じく不可欠な史料である。また、『靖康要録』は主に南宋初頭の政治舞台で活躍していた汪藻の著作と考えられ、この史料が今まで活用されていなかったのはそれが史料として重視されていなかったからというより、欽宗朝という非常に短い時期そのものに対する研究史上での注目が少ないために従来あまり利用されてこなかったからである。かかる史料上の特性

は、本稿の北宋最末期の太原戦役に関する再検討の実行を可能とする。

I. 太原戦役の勃発：遼の滅亡後の宋金関係

北宋建国以来、長く戦争状態にあった宋遼関係は、真宗景德元年（1004）に締結された澶淵の盟より基本的に平和関係が維持され、安定化した。それ以後100年以上にわたって大きな衝突がなく、戦争をも見なかった北宋は、徽宗宣和7年（1125）の冬に、金軍の突然の侵入に見舞われた。その際、金軍の侵入経路にあたる河北路と河東路で北宋側の抵抗がいずれも失敗したということについては、前述の通り、先行研究ですでに議論が行われている。外敵の侵入による滅亡という、中国史上の統一王朝として異例の事態からすれば、北宋の滅亡については、国内事情のみならず外部環境も含めてさらに検討する必要がある。その必要性に基づき、本章はまず、金の崛起に伴う遼・宋・金3国の間の力関係の変化に着目し、そこに潜んでいた太原戦役の発生の背景を究明する。

i. 海上の盟と遼・宋・金関係の変化

澶淵の盟は宋遼間の紛争を平和裡に収束させたものの、その紛争の原因であった燕雲十六州の帰属という根本的な問題を解決できず、「祖宗の故土」を取り戻すという宿願は北宋の治世に一貫して存在した。この宿願は澶淵の盟の破棄につながり、宣和4年（1122）、海上の盟と呼ばれる宋金盟約の締結を促した。北宋は海上の盟を通じて燕雲十六州の回復を図ったものの、遼が滅んだ後に金に攻め込まれた。その経緯については、すでに先行研究により明らかにされている⁽¹³⁾。

注意すべきは、海上の盟の最初期において、北宋の燕雲地域の回復という目標は遼政権の転覆を求める金のそれとは矛盾せず、故に対遼の北伐は、北宋が金と連携して遼金戦争に介入する形をとっていたということである。ところが、金は快進撃を続け、やがて遼との勢力関係を完全に逆転させた一方で、北宋側は苦戦を続けたあげ

く、次から次へと敗戦を繰り返した。中でも、劉延慶が30万の軍隊を率いて易州（現在の河北省易県）を攻めた、比較的影響の大きい戦役の結果について、『三朝北盟会編』に「女眞是れより王師の用うべからざるを知り、中國を輕んずる心有り」⁽¹⁴⁾という記述がある。このような北宋の軍勢力に対する金の輕視という記述は、宋人の後付けの解釈としての側面を否定できない。しかし、北宋の軍隊が協調性に欠け、金との連携作戦の中で次から次へと敗戦し、軍隊が混乱に陥ったのは、『会編』などの史料で確認できる事実であり、実際、足踏みする北宋を尻目に遼の燕京を落としたことは、金の北宋に対する輕視を決定づけただろう。それはつまり、遼金関係の中で主導権を握った金は、宋金関係においても優位に立つようになったということである。

北宋が切望する燕雲十六州は、大まかに太行山脈を境として、燕京を中心とする山前七州、及び雲中を中心とする山後九州に分けられる。対遼北伐の結果、金は人戸・財物を奪い尽くした山前地域を北宋に返したものの、山後地域の返還を拒否した。それは言うまでもなく、戦争を通じて遼・北宋を凌駕する軍勢力を誇示し、外交的にも優位を占めたという金側の認識の表出にほかならない。しかしそれだけでは、山前地域を返還しながら、山後地域の返還を拒否したという扱いの差の理由が十分明白ではない。それについて、金側の史料は、以下のように記す。

宗翰復た奏して曰く、…盟未だ期年ならざるに、今已に此くの如くんば、萬世の守約、其れ望むべけんや。且つ西鄙未だ寧からず、山西諸郡を割付すれば、則ち諸軍は屯據の所を失い、將に經略を有せんとするも、或いは持久し難し、請うらくは姑く置きて割くなからんことを、と⁽¹⁵⁾。

正史である『金史』には建国初期を語る史料が少ない中で、このような戦争方針に関わる記事が散見されるのは非常に貴重である。宗翰（粘罕）は金太祖の従兄弟であり、後に対宋戦争の最高指揮権を有する2人の将領の中の1人となる。この発言の具体的な時期は不明であるが、その前後の「太宗即位し」及び「宋人來たりて諸城

を割することを請う」という記事から、金の太宗が即位した当時の天会元年（1123）の秋、北宋との山後地域に関する交渉の最中であるということが推測できる。

金は、侵攻する理由に北宋が雲中地域の漢人を自領に招いたという盟約違反行為を挙げたが、宗翰の言葉から、山西（即ち山後地域）を入手することこそが、より核心的な目的であったということが窺える。すでに指摘されているように、金軍の北宋侵入には、将領の個人的な野望に主導された権力闘争という背景があったが⁽¹⁶⁾、より根本的な背景として、山西地域を軍事拠点にし、西の西夏、南の宋を制御し、さらに旧遼領土の西北に散在する遼の残存勢力をも鎮圧するという戦略的意図もあったのは確かであろう⁽¹⁷⁾。澶淵の盟以後の国際秩序が大きく動揺していた当時、山西北部の制圧は、急激に領域を拡大した新興の金にとって、その勢力圏の安定的な保持に重大な意義を有していたのである。

この背景の中で、金は以下のような南下の計画を作成した。

（金人）謂えらく中国は獨り西兵のみ用うべし、と。今粘罕の一軍を以て太原を下し、洛陽を取り、西兵の援路を絶ち、且つ天子の蜀に幸するを防ぐを要む。幹離不の一軍もて燕山を下し、眞定を取り、直に東都を掩い、乃ち東都に會すれば、而後不遜せん⁽¹⁸⁾。

この詳細な情報の由来は、金軍に生け捕りにされ、その後北宋へ逃げ帰った武漢英という人物の上奏である。史料に見える粘罕（宗翰）以外のもう1人の将領の幹離不（宗望）は、太宗の息子で、宋側の史料にしばしば「皇子郎君」と書かれている人物であり、北宋への侵攻の中で、東部戦線の責任者に任じられた。強調すべきは、宣和5年（天会元年）という時点において、金側が重要視していたのは山西地域のみであったということは『金史』で示されたものの、上述の史料により、宣和7年において、山西の太原經由で開封を目指すという、明確に北宋を滅亡させる計画が立てられたことである。その変化の要因については、史料の制限があるため明らかにするのは難しいが、金の軍事力の成長、及び政権の成熟という背景は指摘

できると思われる。それでも、やはりこのような変化の中でも、太原の占領の重要性は変化していないということは注意すべきであろう。

後の戦局の展開の伏線になったのは、この史料に語られた金の「西兵」、つまり北宋陝西軍に対する憂慮である。北宋と西夏の辺境にあたる陝西地域は、北宋中期以来小規模な軍事衝突が続き続いていたため、常に大量の軍隊が駐屯し、その実戦経験により、北宋の精鋭部隊として高く評価されてきた⁽¹⁹⁾。これは、金は北宋の兵力の状況を正確に把握していた証拠でもある。

このような状況を前にして、北宋側の実際の防衛線の状況はどうだったのか。次の節で明らかにしようと思う。

ii. 宋金戦争直前における北宋の北方辺境の状況

北宋において、北方辺境はしばしば両河地域として表現されるが、もともと、両河である河北路と河東路とは地形の相違があった。河北路はほぼ平原であり、北宋初期以来、川など天然の要害、及び人工の河塘や溝渠に頼り、辺境防衛を保ってきたものの⁽²⁰⁾、澶淵の盟により宋遼間の国境が定められた際に、辺境地域の軍事設備や屯駐軍隊を増やしてはいけないということが条文で規定され、それ以後、これらの施設も徐々に廃止されるようになった⁽²¹⁾。その背景には、澶淵の盟の締結がもたらした外交モデルの変化など、様々な要素が絡んでいるが、結果として、河北は比較的、防衛線が突破されやすい辺境地域になっていた⁽²²⁾。それに対して、河東路は太行山脈の険しい山地が主であり、軍事面においては「易守難攻」という、政治環境に影響されにくい地形的優位に恵まれ、その通路にあたる太原は戦略的要衝として、古来の戦争で激しい争奪的となってきた。そのことも金が山西地域を手に入れようとし、太原を狙った原因であろう。

さて、金軍の東西両戦線からの侵入計画は実に用意周到である一方、北宋側の辺境防御の状況については、以下の叙述がある。

(童)貫既に太原に在りて、惟だ薬師のみを^{たの}仗み、謂えらく必ず

能く之と抗し、憂うるに足らざるなりと、故に内地は略ぼ防禦無し。亦た屢しば人の變を告ぐる有り。又た沿邊巡檢の楊雍なる者、其の金人に通ずる書を得、之を繳上するも、皆な省みず⁽²³⁾。

遼が減んだ後、燕雲地域から大勢の漢人が北宋へ帰順したが、その中に、郭藥師という渤海出身の遼将もいた。彼が率いた常勝軍は燕山を中心に駐屯し、太原を中心に駐屯していた北伐軍と共に北宋辺境の主な防衛力となった。これまでの研究ではあまり重視されていないが、新たに取得した燕雲地域に軍事力を展開させることは、北宋の全国的な軍事力の配置転換を意味し、決して容易なことではない。たとえ朝廷にはそのような計画があったとしても、実施にいたるまでに相当の時間がかかるに違いない。そこで、この史料が語るように、北伐の最高指揮権を与えられ、同時に燕雲地域の経略を任された童貫は、暫定的であるにせよ防御システムの不足を補う常勝軍に多大な信頼を与えた。

ところが、北宋側から見れば非常に平和だった辺境は、金軍の東西両戦線からの侵入により、突然の危機に直面した。その時期に関する金側の記録は非常に少ないため、宋側の事件当事者の伝記史料に見られるわずかな手がかりが、非常に重要となる。それは当時、接伴金国賀正旦使であった傅察という人物の墓誌である。

(傅察) 二十一日薊州韓城鎮に至るも、使人期を失う。居ること數日、虜騎暴かに至り、夜鎮を圍む。詰旦、酋長數十騎の館に馳入する有り、公飲ましむるに酒を以てし、其の故を問い、變を知る。公を強いて上馬せしむ⁽²⁴⁾。

この墓誌は傅察が金軍に連れ去られ、殺されるまで屈服しなかった気骨を高く評価するものであるが、それよりもこの背景こそが、この史料で最も注目すべき重要な情報である。すなわち、宣和7年11月の時点では、少なくとも北宋から見た宋金関係は、正旦の祝いをするほどの平和な外交関係であり、そのため、東部戦線にあたる薊州に金軍の「暴かに至る」という行動は、北宋にとってあまりにも予想外の出来事であった。外交関係に関するこのような認識は、遠い開封にある北宋朝廷のみならず、前線で軍事を担当する童貫も

同様に持っていた⁽²⁵⁾。

現状にそぐわない北宋の認識に加え、郭藥師や他の投降した漢人の忠誠の曖昧さは⁽²⁶⁾、金軍が侵入してきた時に証明された。金軍を前にして、彼らは北宋の防衛力になるどころか、迷わずに城門を開けて投降したのである⁽²⁷⁾。北方辺境での北宋の最も外側の防衛線がこのように簡単に突破されたのは、戦争の初期段階において存在した、北宋と金のお互いの政策に関する情報や認識の差異がもたらした結果と言える。

本章で検討してきたように、金の崛起による遼金関係の逆転、及び遼と北宋、ひいては自身の軍事力に対する金朝の認識の変化は、澶淵の盟以来の国際関係の解消をもたらした。建国初期の金にとって、西夏や遼の残存勢力への掣肘は、まさに自身の政権安定化の一環であり、太原の占領を北宋侵攻計画の中で非常に重要な一部と見なしたのも、このような背景があったからにほかならない。

一方北宋は、このような国際情勢の変化、とりわけその中でも金の戦略目的の転換を、十分に認識しておらず、金軍の迅速さに圧倒され、辺境防衛は速やかに崩壊した。北宋にとって、一度崩れた防衛線を再構築するのは容易ではなく、ましてや金軍の軍勢がそれぞれ開封と太原を目指す緊急事態の中で、防衛ラインを開封付近にまで後退させるのはやむを得ないことであったと考えられる。

ただし、これまでの検討で明らかにされた背景は、太原での戦役がなぜ北宋の滅亡に直結していたのかという疑問に対する解答にはなっていない。故に、次の章では、太原での戦局について戦役の勝敗という結果以外の要素から考察し、この疑問を解決していく。

II. 北宋軍の瓦解：太原救援戦役

金軍は1125年の冬に北宋侵入を開始し、速やかに開封を包囲したが、一旦引き揚げ、最終的には翌年の冬に開封を落とした。それに対して、太原を中心とした河東では、金軍が太原の包囲を継続していた。東西両戦線の戦況の相違はどこに起因し、また、北宋王朝へどのような影響を与えたのか。本章は、金軍の侵入ルートに沿って、

開封のみならず、河東路の戦局の推移にも注目し、特にそれと開封の戦局との関連を明らかにしたい。

i. 軍事的要衝の太原と政治的中心の開封

燕京周辺の防御線を突破した東部戦線の金軍が河北路を長駆南進したことに宋朝は衝撃を受け、海上の盟を促進した徽宗は、開封防衛の要衝である黄河防衛線に2万人ほどの禁軍を派遣しながらも、皇位を皇太子に押しつけ、開封を逃げ出した。しかしそれら禁軍も敵と戦わずに逃走してしまった⁽²⁸⁾。この背景には、北宋中央禁軍の欠員問題や⁽²⁹⁾、童貫が徽宗と共に東南へ逃げた際に精鋭部隊の大部分を連れ去ったため、中央の防衛に残る軍隊は実力が疑わしいものであったなどの原因が挙げられるが、とにかく、戦局に対する最も重要、かつ直接的な影響としては、北方辺境が突破されて以来、開封に至るまでの最後の防衛線と言ってもよい黄河防衛線が、わずか数日で崩壊したことにつきる。その結果、東部戦線において、金軍は速やかに開封を包囲した。

宋にとっては幸いなことに、西部戦線において、太原は抵抗を貫き、地形の利を生かして河東路での戦局を膠着状態にさせた。それによって東西両戦線の金軍の合流を防いだのみならず、さらに重要なのは、開封と西北との交通を確保し、勤王軍の救援到来を可能にしたことである。(表1及び附図を参照)

表 1 靖康元年正月勤王軍の状況⁽³⁰⁾

将領	募集地域	人数
統制官馬忠	京西	
范瓊	京東	約10,000
検校少保・静難軍節度使・河北河東路制置使种師道、武安軍承宣使姚平仲	涇源・秦鳳	約19,000
熙河路経略使姚古	熙河	
資政殿大学士・軍前宣諭使宇文虚中	東南	約20,000
秦鳳路経略使种師中	秦鳳	約20,000
直秘閣参軍事折彦質、知府州折可求	府州地域	

張俊	鄺延	
韓時中	環慶	
馬千	涇源	
劉光国, 楊可勝, 李宝	不明	

史料によれば、開封へ救援に来た勤王軍の人数は20万に至ったが、実際、史料の中で人数まで明記してあるのは合わせて7万弱に過ぎない⁽³¹⁾。他に人数不明の勤王軍もあったが、非常に短い時間で募った兵士が13万に至る可能性は低く、両方を合計しても、おそらく10万前後に過ぎなかったのではないと思われる。中でも特に注目に値するのは、これら勤王軍の中では、陝西軍が主力であったということである。徽宗と童貫が開封にいた精鋭軍隊を東南へ連れて行ったこと、また、黄河で中央禁軍が容易に崩壊したことを想起すれば、これら開封へ赴いた陝西軍の重要性は分かるであろう。

靖康元年(1126)正月において、勤王軍が集まったという状況は一見すれば北宋側にとって有利であったにもかかわらず、北宋朝廷は金軍との和議を選択し、金軍の条件をすべて呑み、金銀などの財物や、人質のほか、河東と河北にある太原・中山・河間3鎮の割譲まで許した。この決定は従来、皇帝などの政策決定層、とりわけ和議を主張する、所謂主和派の「動揺」や「懦弱」、及び国の危機を顧みずに権力闘争に集中していた証拠として扱われてきた⁽³²⁾。しかしこれに関して、注意すべき点は2つある。まず、主和派と主戦派の論争は、あくまでも手段をめぐる論争であり⁽³³⁾、金軍の撤退を求めるという目的に関しては意見が一致していたことである。

そして最も重要なのは、当時の戦局の全体に目を配れば、本当に首都の安否のみを考慮し、その決定を下したのか、という疑問である。北宋側の史料では、金へ誓書を送ったという事実のみが確認できるが⁽³⁴⁾、より詳しく誓書の内容まで収録した『大金弔伐録』の記述は、その経緯を補足する。

①近ごろ聞く、大兵已に太原に到り、攻圍するも未だ下らず、と。和好の後、義は一家に同じ。願わくば速やかに人兵を約擲

し、以て一城生靈の命を全うせんことを。兼ねて河西兵馬の隙に乗じて深入するを恐るれば、亦た望むらくは早くに約回を與えんことを、と⁽³⁵⁾。

②皇子郎君兩朝和好の重きを^{あつ}悖くし、特に開允（和議）を爲し、許すに退師を以てす。……尙お元帥遠きに在りて、未だ的實を知らざるを慮る。今使人を遣わし皇子郎君の差する所の親信とともに、軍前に尋詣し諮白せしむ。惟だ冀^{のぞ}むらくは早くに軍馬を抽回するを爲し、生靈を殘害するを致すを免れんことを⁽³⁶⁾。

この中で、①の宗望宛ての報書からは、包囲された太原の戦局に対する憂慮、そして陝西地域を虎視眈々と狙っている西夏の侵攻に対する疑念が現われている⁽³⁷⁾。また、②の宗翰宛ての報書からは、和議を結んだという事実を一刻も早く伝達し、太原への攻撃を止めてほしいという緊迫した要望も読み取ることができよう。この和議の目的は無論、戦争の停止にあったが、その背後には、勤王軍の実際の人数が金軍に対抗するには十分ではなかったこと、また、開封—河東路（太原）—陝西地域の連動性の保持や、開封に迫ってくる金軍と北宋の西北辺境へ圧力をかけつつある西夏の前で、国土全体の防衛体系のバランスを求める、北宋朝廷の苦心がある。結果的にそれが正しかったか否かはともかく、その和議を決定した考慮の範囲は、決して北宋朝廷、もしくは開封のみに止まっていないのである。

ii. 太原救援の失敗とその影響

靖康元年2月、和議に従って東部戦線の金軍は開封から引き揚げた一方、西部戦線の金軍はまだ太原を囲んだままであった。それを受け、北宋側は3月から6月にかけて、太原方面へ計2回にわたって援軍を派遣していた。この行為は、勤王軍の集結や、開封の金軍の撤退を見て割譲の決断を翻意したかのように読み取れるが⁽³⁸⁾、実際、後世の筆記史料から、当時の太原は「密詔」を受けていたことが窺える⁽³⁹⁾。欽宗の詔や、金への報書には、すでに太原・中山・河間3鎮の割譲が明示してあったため、「密詔」まで出したのは、表の

割譲の意と異なる内容を伝えることが目的であったと推測できる。
前節で論じた太原の戦略的重要性こそが、北宋側の政策の「反復」
の本当の原因であろう。

北宋の2回の救援行動の状況をまとめれば、表2のようになる。

表2 靖康元年の太原援軍の状況⁽⁴⁰⁾

時間	宣撫使	将領	救援方向	結果
靖康元年 3月	种師道	种師中	中山・河間 →太原	种師中は戦死し、兵士は 敗走。姚古は大敗北。
		姚古	太原	
		黄迪 (鄜延路軍馬使)	太原	
靖康元年 6月	李綱	劉韜	中山、河間	援軍兵力の不足で地元で 組織したという形であっ たが、金軍に遭遇すると すぐに潰走。
		折彦質、解潜	河東威勝軍 →太原	
		張灝、折可求	河東・陝西 →太原	

ここから見出せるように、1回目の救援に赴いた兵力の構成は、
主に种師道・姚古らが率いて陝西地域から来た勤王軍であった。种
氏・姚氏とえば、いずれも代々武将を輩出した軍事的名門であり、
彼ら個人の指揮能力への評価も高かった。太原救援のための北宋の
努力は、文字通りその全力を傾けるものであったと言えよう。しか
し、宋軍が3方向に分かれて進撃する方針を取る中で、种師道は出
馬せずに滑州に駐屯し、种師中は一時的に隆徳府を回復したものの、
最終的には姚古との連絡を十分に取れず、金軍にそれぞれ各個撃破
された。种・姚両大将の失敗は鄜延路軍馬使の黄迪の逃走を招き、
1回目の救援は全面的に失敗した。この連携不足による敗北が軍事
組織としての北宋軍の弱点を示すものであるということは、すでに
先行研究で指摘されているが⁽⁴¹⁾、個別の軍事行動における将帥間で
の連絡の齟齬を、軍事システム全体にまで敷衍することには議論の
飛躍があるだろう。実際、この敗北の背景には、种師中らの将領の
報告とは別系統で前線から情報を収集する朝廷の判断ミスという事

情もあったものの⁽⁴²⁾、ここで強調したいことは、北宋がこの大規模な軍事行動の失敗を上手く收拾することができなかったことと、この敗北のその後の戦局に対する多大な影響である。

知磁州趙将之言えらく、种師中の兵潰え、被傷有るの人道路に疲曳すること甚だ多し。臣已に宜しきに随い措置し、榜を出して招收し、^{かり}權に一醫藥院を置き収管醫治す。臣一州の醫する所の如きも已に二百餘人、竊かに慮るに別路州郡尙お多く之有らん。……已に降りし指揮に依り、招到したる潰散の人を將て並びに上邊に發し太原を應援せしむるの外、被傷有りて未だ驅使に堪えざるの人は、並びに且く逐州をして醫治せしめ、平愈の日を候ちて、逐旋に結隊發遣せしめんことを、と。之に従う⁽⁴³⁾。

従来重視されてこなかったこの史料は、种師中が戦没した後、彼が率いた軍隊が潰散したため、河北路南西部の磁州に敗残兵が充満した有様を伝える。そのうえで、①种師中の敗戦により、組織が壊滅した兵士たちは河北路を含む周辺地域に潰走したこと、②朝廷の命令に応じて、逃走や負傷などの原因で各地に散在している兵士を地方政府が再組織し、もう一度太原へ派遣した、ということが分かる。救援軍が複数の方面に潰走したという現実を考えれば、磁州のみならず、他の地域でも同じ状況が現出したのではないかという、ここでの知州の推測は合理的であろう。また、この知州の趙将之が言及した「已降指揮」とは、

六月、詔すらく、應る河東に潰散せし諸路の將佐は、並びに逐路の帥守に仰せて發遣し河東河北制置司に赴き、功を以て過を贖わしめよ、と⁽⁴⁴⁾。

という、逃走した兵士を河東河北制置司に派遣させ、逃走の罪を償わせるという命令に関連すると思われる。前述の知州の趙将之の上奏と合わせて見れば、朝廷は2回目の太原救援軍を派遣したとは言え、その実体は1回目の救援で潰走した兵士の再編制に過ぎない、ということが明白である。また、表2に挙げた将領の1人である張灝に関して、

張灝は、孝純の子なり、朝廷以て河東察訪使と爲すに、河東の

義勇・禁軍を招くこと五萬、遼州より以て太原を夾援せしむ⁽⁴⁵⁾。という記録が示すように、河東現地では臨時に軍隊の徴募が行われ、父孝純の人望を借りた張灝はあくまでもこれらの徴募兵を率いて応援に赴いただけである。北宋の義勇軍とは地元の郷兵であり、主に河北・河東・陝西など辺境地域に由来する⁽⁴⁶⁾。ここでの「禁軍」の詳細は不明であるが、辺境防衛を務める地方禁軍、及び敗戦により当地で潰散した中央禁軍の両者からなっていたのではないかと考えられる。金軍の攻勢下で混乱する当時の河東路の状況を考えれば、急遽徴集した5万という人数は非常に疑わしい。またその人数が現実を反映していたとしても、臨時募集や潰走した兵士からなる「援軍」の組織的な戦闘力が頼れるものとも考え難い。

また、時代は下ったものであるが、紹興6年、荊湖北路経略安撫司からの、次のような上奏も存在する。

荊湖北路経略安撫司言えらく、湖北路の澧、辰、沅、靖州は並びに蠻徭の溪洞に接連するに係るに、昨て田を四州に營み、共に弓弩手九千九百一十人を招置し、已に緒に就くを見る。……止だ靖康元年内の全軍調發せられ、河東に應援し陥没し、又た兵火に遭うに困り、遂に死亡闕額の數多きを致す。今若し盡く省汰を行わば、澧、辰、沅、靖州は並びに正兵の防守する無きに緣り、竊かに蠻夷の觀望を引惹し、別に事を生ずるに致すを慮る、と⁽⁴⁷⁾。

紹興6年と言えば、すでに北宋が滅亡しておよそ10年後であるが、太原救援のための兵力徴発と死傷の損失は、当時も長期的な影響を与えていたことが窺える。荊湖北路は、南宋時代には対金防衛の前線となったが、北宋においては辺境の河東・河北地域からは無論、首都の開封からも遠く離れている南方地域であった。北方の軍隊を徴用して南方へ派遣したという先例は、仁宗朝の儂智高の乱や徽宗朝の方臘の乱を鎮圧した際にあったものの、その逆はきわめて珍しい。注意すべきは、弓弩手とは、禁軍などの正規軍とは異なり、地元で募られた土兵で、西南の少数民族と境を接する地域に置かれた民兵に近い組織であることである。長距離移動にかかる費用や実際

の戦闘力の疑わしきは言うまでもなく、駐屯軍の人数も実力も明らかに優位を占める北方へ、長距離移動の代価を惜しむことなく南方の土兵を派遣する行為は、北方の北宋軍が余程の窮状を抱え、機能不全に陥っていた証拠にはかならない。このような徴発は、史料上では荆湖北路の1例しか確認できないものの、前線で必要とされる兵員の総数と時間的逼迫を考えるならば、おそらくこの荆湖北路の弓弩手の徴発は単独の事例ではなく、実際に非正規軍に対する徴発は、国内のもっと広い範囲にまで及んだ可能性が非常に高いと言える。

本節での検討をまとめれば、靖康元年3月から7月にわたる2回の太原救援の実態と結果は次のようになるだろう。1回目の救援は開封からの勤王軍が主として派遣されたが、戦略的な齟齬により金軍に各個撃破された。2回目に至り、北宋側の兵力不足は明らかとなり、辛うじて編制された救援軍の人員構成も再編された敗残兵、及び河東・河北地域の在地非正規軍の動員、さらには南方地域の非正規軍の徴発という形となった。敗戦に敗戦が重なり、最終的に太原の救援はもはや太原や河東地域だけではなく、北宋の大半の領土を巻き込み、長期的な影響を与える軍事行動となったのである。

要するに、太原救援戦役は、北宋全域に戦役の結果そのもの以上の大きな影響を及ぼした。政策決定レベルでは、河東路の戦況に縛られ、北宋朝廷は両戦線の統合に非常に苦慮した一方、前線の戦局レベルでは、陝西・河北・河東などの辺境地域に止まらず、南方地域まで太原救援戦役に巻き込まれたのである。その敗戦の悪影響は、空間的には太原を遥かに超え、時間的にも戦役の実際に起きた靖康元年に止まらなかった。とりわけ、軍事活動の中で敗戦がもたらした軍事力の損耗は、簡単に回復できないものだという点は注意すべきであろう。李華瑞氏が指摘した「太原の陥落が北宋の滅亡を導いた」という結論は根本的に間違っていないが、太原の陥落は単なる「弱体な軍事力」に由来する必然的な結末ではなく、流動的な戦場で次々と生起する問題とその掌握・統制に中央政府が苦慮し、失敗したという、古今あらゆる戦争で見られた「軍事過程」の1コマ

と捉えるべきだろう。偶然的な要素もあるが、その経緯に潜んでい
る政治の中心と軍事の中心との空間的な運動性、及び政策決定と前
線状況との相互関係こそが、北宋の滅亡をもたらした根本的な原因
である。だが北宋はその軍隊とともに滅亡したものの、そこには南
宋再建の可能性を残した。次章はそれについて検討する。

III. 北宋から南宋へ

靖康元年9月3日、8ヶ月の包囲を経た太原はついに陥落し、西
部戦線の金軍がさらなる南進を果たした。その結果、北宋国土内部
での戦力の移動ルートは遮断された。それは北宋国土の分断だけで
はなく、最も現実的な問題として、中央政府の遠隔地域に対する制
御力の弱体化ないし消失という事態をももたらした。

太原での抵抗を強く主張し、さらには全力で抵抗する方針を促進
した主戦派は、当然ながら、太原の陥落により失脚した。つまりは
太原での軍事的失敗は、政戦両面において北宋に強い打撃を与えた
のである。その後、軍事力に頼って金に抵抗することを諦め、実際、
その力をも失った北宋は、遼の残存勢力との連携を求めるという無
謀にも近い試みをしたものの、その情報を探知した金は、総力を挙
げて2回目の南侵を行う。その進展は、1回目に比べて速やかなも
のであった。

粘罕、河を渡り、乃ち兵五萬を以て潼關を守り、以て西兵の來
たるを扼す。其の後范致虛は陝西に至るも敢えて進まず、錢蓋
の兵は商・虢・唐・鄧よりするも兵散ずるは、皆な粘罕の計な
り⁽⁴⁸⁾。

北宋の陝西方面と中央の連絡通路が断たれた結果、北宋の諸軍は
陝西で足止めとなり、あるいは分散して潼関以南の商州、京西南路
の唐州・鄧州に迂回したが、開封に接近することはかなわなかった
(附図参照)。

東西両戦線による金軍の包囲網に対して、北宋側に開封を保持し
得るほどの軍事力はすでになく、ついに首都の陥落を迎えた。この
後、南宋初期になり、南宋朝廷が陝西地域の回復に非常に力を入れ

た背景として、太原陥落のこのような経緯と、開封回復のための陝西—山西ルートの重要性を、南宋側が強く認識していたことが考えられるだろう。

ここで、滅亡まで追い詰められた北宋に次の時代への希望が残されていたことが、次のような記録に語られている。

又た山下に逃避の人有り、連綿として絶えざるを見る。聞くなく、各おの散亡の兵卒を集め、寨柵を立てて以て自衛し、弓刀を持ちて以て賊を捍ぐと。金人數しば人を遣わし多方招誘するも、必ず剿殺せらるるに、節を仗みて義に死し、力めて腥膻を拒むの意を見るべし⁽⁴⁹⁾。

これは太原が陥落した後に派遣されたため河東地域を通った使者の李若水の上奏文であり、太行山地域に砦を立てて敵に抵抗する人々の存在を北宋朝廷に報告している。南宋時期、金の侵攻にさらされた両淮地域に山水寨という自衛システムが生み出されたということはすでに注目されてきたが⁽⁵⁰⁾、ここで言及された、北宋最末期に民間武装勢力が活躍する太行山脈近辺、つまり河北・河東両路は、太原救援戦役の中で逃走した兵士が最も密集していた地域であるということを想起する必要がある。南宋の防衛体制構築、及びそのための方針や政策の決定については、このように北宋末期に活躍していた武装勢力のあり方や、軍事的基盤の継続性をも考慮すべきと思われる。

前述で強調したように、実際の戦争の中で、如何なる原因でも、一度損失を被った軍隊を戦線に復帰させるのは、決して簡単なことではない。しかしそれ故、皮肉にも、北宋末の各戦役の失敗を直接的にもたらした兵士たちの逃走は、南宋の軍隊が速やかに「回復」へと向かう可能性があったことを示唆する。つまり、軍隊そのものを「建て直す」のではなく、北宋の潰された軍隊を「再組織」することである。このような基盤に基づき、南宋の軍事制度や軍事政策には言うまでもなく、北宋末期以来の軍事的形勢の影が落とされていた。これは、南宋初期の政治史・軍事史研究にあたり、「偏安」などの問題を取り扱う際、より時代背景を視野に入れる必要性を示唆

するであろう。

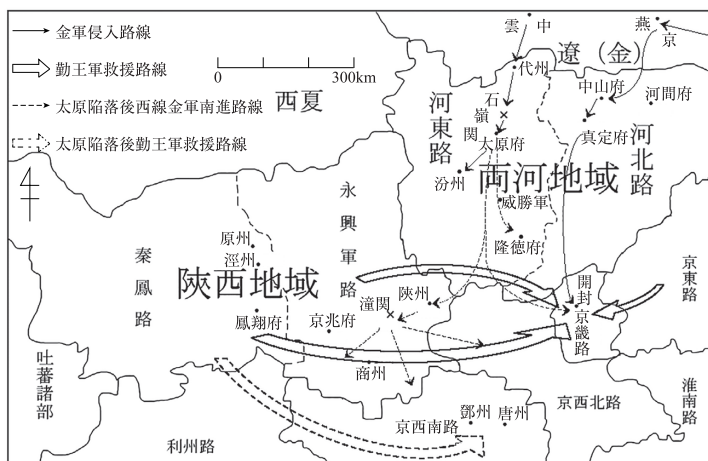
従来、北宋から南宋への政権の移転は宋代の政治史や社会史、または思想史の研究者に注目され、その間の「転換」も強調されてきた⁽⁵¹⁾。また、軍事面では、南宋時代における地方武装勢力の成長が注目を集めた⁽⁵²⁾。これらは新たな武装勢力の形として北宋時代の軍事力と対照的に取り扱われ、彼らの成長が両宋交代がもたらした地域社会の「変革」であったとしたロバート・ハイムズの研究が長く議論されてきた。しかし一方で、本稿の検討を踏まえれば、戦争という時代背景、及びそれに関連する地域性も、地方武装勢力の形成と発展に関わる決定的な要因であり、この意味では、いわゆる南宋への「転換」が存在する一方、連続性という面もあったと考えられる。

お わ り に

本稿は、宋金戦争の中でも北宋の滅亡に関連付けて重要視されてきた太原戦役につき、12世紀の金の崛起に伴う澶淵の盟以来の遼・宋・西夏など多国関係のバランスの変化という背景に照らし、その失敗に関わる諸要素を1つの軍事過程として再検討を行った。

金は太原を国の安定と発展に関わる軍事拠点とし、山西の獲得を目指したが、この金側の戦略目的を、北宋側は正確に把握することができなかった。戦争が勃発して以来、北宋は政治的な妥協と場当たりの軍事手段を繰り返し、異なる方針の間で揺れ動いていたかのように見えるものの、その背後には開封と太原両方の戦線の統合を求める苦心が見て取れる。この軍事過程の中で、澶淵の盟以来の平和という表の現象に隠されていた開封―太原の軍事的連動や、中央政府の政策決定と前線での軍事活動との相互影響という関係が浮上し、その影響は南宋にまで続いていたのである。

北宋が太原戦役にできる限りの兵力を動員したものの、戦局は悪化の一途を辿ったという事態からは、その軍隊が精強であったとの見解を提示し難いことは事実である。しかし、北宋滅亡の軍事過程の究明により、その滅亡には軍事力の欠缺より遥かに深く、国際情



附図 靖康元年における宋・金両軍の動き

※譚其驥主編『中国歴史地図集』第六冊（香港三聯書店、1992年）をもとに作成

勢の絡んだ複雑な原因があるということが分かる。そもそも、外敵の侵入により滅ばされたというのは中国歴代の統一王朝の中では特例であり、本稿で検討してきた太原占領という金側の思惑に左右される戦争の発端や、太原戦役の経緯に大きく影響する宋・金・西夏の力関係のバランスなどの諸要素は、北宋の滅亡が「軍事的軟弱」という単純な内部要因によってもたらされた結末ではないことを意味する。また、そのような複雑な状況の中で金軍のさらなる南進を受け、北宋の滅亡によってもたらされた課題である防衛ラインの再構築に試行錯誤を重ね、再建を実現したという点も、南宋の性格についての再考を促す。

本稿は太原戦役が続く中で北宋の軍隊が崩壊していくという過程、及びその影響を明らかにしたが、太原戦役の失敗の政治的な原因に関する検討は、紙幅の都合上割愛した。その政治的な原因は、宋王朝の軍事体制と密接に関連するものであり、それを究明することによって、北宋から南宋への軍事体制の連続性と転換は、より明白になるとと思われる。それらの問題については、今後の課題としたい。

註

- (1) 杉山正明、古松崇志は、複数の大国のパワーバランス的な関係を「澶淵体制」として提示し（杉山正明『中国の歴史：疾駆する草原の征服者—遼西夏金元』、講談社、2005年、古松崇志「契丹・宋間の澶淵体制における国境」、『史林』第90巻第1号、2007年）、その枠組みに基づいた井黒忍「受書礼儀に見る十二～十三世紀ユーラシア東方の国際秩序」（平田茂樹・遠藤隆俊編『外交史料から十～十四世紀を探る』、汲古書院、2013年）は、外交文書の角度から国際環境と秩序を分析した。虞雲国「試論10–13世紀中国境内諸政権の互動」（張希清主編『10–13世紀中国文化的碰撞与融合』上海人民出版社、2006年）は、宋と遼・西夏・金との関係は、歴代の中原王朝と周辺政権とは異なる「対等」関係であるということを強調した。
- (2) 寺地遵『南宋初期政治史研究』（溪水社、1988年）、何忠礼『南宋政治史』（人民出版社、2008年）を参照。
- (3) この問題に関して、20世紀以来、政治史や社会経済史など、様々な研究分野で触れられてきたが、最も代表的なものとして、王曾瑜『宋朝軍制初探（増訂本）』（中華書局、2011年）が挙げられる。
- (4) 前掲註(1)杉山氏著書を参照。
- (5) 石津朋之編『戦争の本質と軍事力の諸相』（彩流社、2004年）第4章、長尾雄一郎・石津朋之・立川京一「戦闘空間の外延的拡大と軍事力の変遷」。初出は「陸と海と空と、そして…——軍事力の具体的形態と統合」（『防衛研究所紀要』防衛研究所創立五〇年記念特別号第5巻第2号、2003年3月）。
- (6) 現代軍事力の構成は空軍・海軍・陸軍であるが、宋代には無論、空軍は存在せず、水軍（海軍）も南宋期に防衛前線が淮河地域へと移るまでは、さほど重視されてこなかった。王曾瑜氏によれば、北宋の水軍は主に南方地域に、地元の治安維持のために設置され、北方で機能していたのは山東登州の水軍のみであった。南宋時期に入り、各地で水軍の設置が進み、特に淮河・長江流域には重点的に大規模な水軍が置かれ、防衛戦役の中で大きな役割を果たした。前掲註(3)王曾瑜著書を参照。
- (7) Martin Van Creveld, *The Transformation of War: The Most Radical Reinterpretation of Armed Conflict Since Clausewitz*, New York, Free Press, 1991.

氏は、軍隊組織の規模をある程度以上に大きくすることは現実的に不可能であり、実際、膨大な組織は弾力性を失い、硬直化をもたらすということ、また、戦争中の情報は決して完璧ではなく、情報のずれも常に戦争の失敗を招くということを強調した。

- (8) 李天鳴『宋元戦史』（台湾食貨出版社、1988年）のように南宋末期における南宋・金・モンゴル間のすべての戦いを取り扱う著作は存在するが、時間的に南宋末に限られており、また、内容もあくまでも戦争の経緯の説明に過ぎない。曾瑞龍『経略幽燕——宋遼戦争軍事災難の戦略分析』（北京大学出版社、2013年）、同『拓辺西北——北宋中後期対夏戦争研究』（北京大学出版社、2013年）は軍事学の理論に基づいて北宋初期から中期にかけての重要な宋遼・宋夏戦争を政治政策に結び付けて詳しく検討を行ったものの、非常に残念なことに、それ以後の時代に検討が及んでいない。
- (9) 張邦煒は「靖康内訌解析」（『四川師範大学学报』第28巻第3期、2001年5月）で、金軍の侵入を前にして、精鋭部隊を連れて開封から逃げ出した徽宗が太上皇帝として滞在先の東南地方に軍事や財政面の命令を出したことを受け、欽宗は徽宗の開封への帰還や権力の規制に腐心したということをし、「内訌」として詳しく論じた。
- (10) 李華瑞「宋金太原之戦」（『西北師大学報』第30巻第6期、1993年8月）。氏によれば、太原の陥落により、軍事上の要衝である潼関が金に占領され、陝西地域の勤王軍の救援が阻止されたことは、北宋が滅亡する直接的な要因の1つである。
- (11) 宋代の使者記録に関しては、劉浦江「宋代使臣語録考」（張希清主編『10-13世紀中国文化的碰撞与融合』上海人民出版社、2006年）を参照。兩宋交代期という混乱時期においては、史料の散逸が多いため、『三朝北盟会編』の史料価値がいっそう高まる。実際、その重要性は早くから重視され、陳素素「三朝北盟会編考」（『中央研究院歷史語言研究所集刊』第6本第2・3、1936年）、「徐夢莘考」（『国学季刊』第4巻第3期、1934年9月）、王德毅「徐夢莘年表」（『大陸雜誌』第31巻第8期、1965年10月）などの研究で強調されている。本稿では2008年に出版された上海古籍出版社影印本を利用し、以下は『会編』と略称する。
- (12) ただし、それに基づいた井黒忍「金初の外交史料に見るユーラシア東

- 方の国際関係——『大金弔伐録』の検討を中心に——」（荒川慎太郎・高井康典行・渡辺健哉編『遼金西夏研究の現在』3，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，2010年）のような，東アジア諸国の外交関係をめぐる研究はすでにあるが，戦争史や政治史の史料としての『大金弔伐録』の価値はまだ十分に認識されていない。
- (13) 沈起煒『宋金戦争史略』（湖北人民出版社1958年），趙永春『金宋関係史』（人民出版社，2005年），顧宏義『天裂：十二世紀宋金和戦実録』（上海書店出版社，2012年）などを参照。
- (14) 『会編』巻70・靖康元年閏11月27日戊午・引『林泉野記』。「光世既不至，諸軍失援，延慶軍聞亂而潰，自相蹂踐，赴河死者數萬。女眞自是知王師不可用，有輕中國心。」
- (15) 『金史』巻74「宗翰傳」。「宗翰復奏曰，…盟未期年，今已如此，萬世守約，其可望乎。且西鄙未寧，割付山西諸郡，則諸軍失屯據之所，將有經略，或難持久，請姑置勿割。」
- (16) 外山軍治「山西を中心とする金将宗翰の活躍」（『金朝史研究』東洋史研究会，1964年，第3章，初出『東洋史研究』第1巻第6号，1936年）を参照。
- (17) 「西鄙」とは，西北にある西夏のことを指すと考えられるが，敗走した遼の貴族は旧領土である遠方の西北へ逃げ込み，西遼と呼ばれる政權を立てたということにも注意すべきである。実際，残存した西遼政權は長期にわたり活躍し，モンゴル高原に少なからぬ影響を与えたため，金はその対処にも非常に力を入れたのである。Michal Biran, (*The Empire of the Qara Khitai in Eurasian History: between China and the Islamic World.*) Cambridge University Press, 2005.
- (18) 『会編』巻23・宣和7年11月28日。「(漢英)乃徑走闕下，具以虜情告朝廷，曰，金人之謀深矣。謂中國獨西兵可用。今以粘罕一軍下太原，取洛陽，要絕西兵援路，且防天子幸蜀。幹離不一軍下燕山，取眞定，直掩東都，乃會於東都，而後不遜也。」
- (19) 前掲註(3)王曾瑜著書，113頁。
- (20) 閻沁恒「北宋對遼塘埭設施之研究」（台湾『国立政治大学学报』1963年第8期），林瑞翰「北宋之边防」（『宋史研究集』第13輯，中華叢書編審委

員会1981年版)を参照。

- (21) Nicolas Tackett, *The Origins of the Chinese Nation*, Cambridge University Press, 2017, pp. 89-94.氏はその原因として、澶淵の盟以後、宋人は遼との平和関係の継続を信じていたことを指摘している。
- (22) 詳細は拙文「北宋防衛体制の変遷：研究状況概要」(『史滴』40号, 2018年12月)を参照。
- (23) 『会編』巻24・宣和7年12月10日。「貫既在太原, 惟仗藥師, 謂必能與之抗, 不足憂也, 故內地略無防禦。亦屢有人告變。又沿邊巡檢楊雍者, 得其通金人書, 繳上之, 皆不省。」
- (24) 『会編』巻22・宣和7年11月21日・引「傳察墓誌」。「二十一日至薊州韓城鎮, 使人失期。居數日, 虜騎暴至, 夜圍鎮。詰旦, 有酋長數十騎馳入館, 公飲以酒, 問其故, 知其變。強公上馬。」
- (25) 辺境が突破されたという情報を耳に入れた童貫は、「金人國中初定, 些少人馬在邊上, 怎敢便做許大事(『会編』巻23・宣和7年12月1日・引『茆齋自敘』)」と「大いに驚き」, そして即座に開封へと逃走した。やはり彼は、「國中初定」の状態にあった金があえて攻めてくるということを予想もしていなかったからであろう。
- (26) 劉浦江「説“漢人”——遼金時代民族融合的一個側面」(『民族研究』1998年第6期)を参照。
- (27) 『会編』巻23・宣和7年12月8日条。
- (28) 『会編』巻26・宣和7年12月26日, 同卷靖康元年正月2日。
- (29) 何玉紅・曹偉芹「禁軍闕額與北宋軍政」(『學術月刊』第43卷, 2011年第12期)を参照。なお, 曾我部静雄『宋代政経史の研究』(吉川弘文館, 1974年3月)第1章第5節に, 北宋後期の保甲法も, 開封の兵力不足をもたらしたという点を指摘している。
- (30) 表は『長編紀事本末』巻145, 『会編』巻30, 巻32, 『宋史』巻23「欽宗本紀」, 『宋史』巻335「种師中伝」より作成。また, 渡邊久「靖康の変前後の折彦質」(『龍谷大学論集』472号, 2008年7月)も参照。
- (31) 『宋史』巻187・兵一, 『会編』巻30・靖康元年正月20日, 『宋史』巻371「宇文虚中伝」。
- (32) 前掲註(9)張邦焯論文を参照。

- (33) 実際、軍勢力のみでは明らかに勝てないという状況を見抜き、当時の主戦派のリーダーであった李綱すら「(金軍) 欲求犒師之物、當量力以與之、至於土地、則祖宗之地、子孫當以死守、不可以尺寸與人」という発言があり、あくまでも金軍の条件をどこまで呑むかということをめぐる議論である(李綱『靖康伝信録』巻上・宣和7年12月13日)。
- (34) 『長編紀事本末』巻147・靖康元年正月11日。
- (35) 『大金弔伐録』43「報進誓書及乞約束書」。「近聞大兵已到太原、攻圍未下。和好之後、義同一家。願速約攔人兵、以全一城生靈之命。兼恐河西兵馬乘隙深入、亦望早與約回。」
- (36) 『大金弔伐録』45「宋少主與左副元帥府報和書」。「皇子郎君惇兩朝和好之重、特爲開允、許以退師。…尙慮元帥在遠、未知的實。今遣使人同皇子郎君所差親信、尋詣軍前諮白。惟冀早爲抽回軍馬、免致殘害生靈。」
- (37) 実際、黒水城で出土した『宋西北辺境軍政文書』より、およそ1ヶ月後の靖康元年2月15日に、陝西環慶路に西夏軍が侵入してきたという報告が確認できる(『俄羅斯科学院東方研究所聖彼得堡分所蔵黒水城文獻』第6冊、上海古籍出版社、2000年)第199葉。
- (38) 前掲註(13)趙永春著書、62-64頁。
- (39) 周密『齊東野語』巻11「滕茂実」。「靖康初、以太學正兼明堂司令、與路允迪、宋彥通奉使金國、割三鎮。太原尋奉密詔、據城不下。」また、李綱の文集『靖康伝信録』に、欽宗から「専断」という指摘を受けた李綱は、「此二人者、迺齋御前蠟書至太原、當時約以得回報卽與補授」と弁解したという記録が、密詔の存在を裏付ける。
- (40) 『宋史』巻23「欽宗本紀」、巻335「种師道伝」、『会編』巻46から巻49までの記事に従って作成。
- (41) 前掲註(10)李華瑞論文を参照。
- (42) このような情報収集は北宋の軍事制度の一環ではあるが、太原戦役のケースでは、宗翰の兵が暑さ対策で休息し、家畜の世話をしていたことを、偵察者は金軍の解散だと見て、朝廷に誤った報告をし、結果的に朝廷の誤った催促の命令を促した。『長編紀事本末』巻145・靖康元年5月2日。「時粘罕以暑度隰、會西山之師於雲中、所留兵皆分就畜牧、覘者以爲兵散、將歸告於朝廷。大臣信之、從中督戰無虛日、使者項背相望、詔書以

逗撓切責師中。」

- (43) 『宋会要輯稿』食貨59・21・靖康元年6月14日。「知磁州趙將之言，种師中兵潰，有被傷之人疲曳道路甚多。臣已隨宜措置，出榜招收，權置一醫藥院收管醫治。如臣一州所醫已二百餘人，竊慮別路州郡尚多有之。…依已降指揮，將招到潰散人並發上邊應援太原外，有被傷未堪驅使人，並且令逐州醫治，候平愈日，逐旋結隊發遣。從之。」
- (44) 『宋史』卷193・兵七・靖康元年6月。「六月，詔應河東潰散諸路將佐，並仰逐路帥守發遣赴河東河北制置司，以功贖過。」
- (45) 『会編』卷50・靖康元年7月27日。「張灝者，孝純之子也，朝廷以爲河東察訪使，招河東義勇・禁軍五萬，由遼州以夾援太原。」
- (46) 註(3)王曾瑜『宋朝軍制初探』第3章を参照。
- (47) 『宋会要輯稿』兵1・19・紹興6年12月26日。「荆湖北路經略安撫司言，湖北路澧・辰・沅・靖州並係接連蠻徭溪洞，昨營田四州，共招置弓弩手九千九百一十人，已見就緒。…止因靖康元年内全軍調發，應援河東陷沒，又遭兵火，逐致死亡闕額數多。今若盡行省汰，緣澧・辰・沅・靖州並無正兵防守，竊慮引惹蠻夷觀望，別致生事。」
- (48) 『会編』卷63・靖康元年11月15日。「粘罕渡河，乃以兵五萬守潼關，以扼西兵之來。其後范致虛至陝西而不敢進，錢蓋兵由商・虢・唐・鄧而兵散者，皆粘罕之計也。」
- (49) 『会編』卷57・靖康元年10月6日。「李若水上書乞救河東河北。臣自深入金人亂兵中，轉側千餘里，……又於山下見有逃避之人，連綿不絕，聞各集散亡兵卒，立寨柵以自衛，持弓刀以捍賊。金人數遣人多方招誘，必被剿殺，可見仗節死義，力拒腥膻之意。……」
- (50) 黃寬重『南宋地方武力：地方軍與民間自衛武力的探討』（国家図書館出版社，2009年7月）。また，それより前にも，杜光簡「抗金義軍勢力之消長」（『宋遼金元史論集』崇文書店，1971年），村上正二「宋・金抗爭期における太行の義士」（『モンゴル帝国史研究』風間書房，1993年。原題「宋・金抗爭期における太行の義士（一）（二）」，『大正大学大学院研究論集』3・5，1979・1981年）があり，地方武装勢力を対象として取り上げた。
- (51) Robert Hymes, *Statesmen and Gentlemen: The Elite of Fu-Chou, Chiang-Hsi, in Northern and Southern Sung*, Cambridge University Press, 1986, 寺地遵『南

宋初期政治史研究』(溪水社, 1988年), James T. C. Liu, *China Turning Inward: Intellectual-Political Changes in the Early Twelfth Century*, Council on East Asian Studies, Harvard University, 1988, 鄧小南『祖宗之法: 北宋前期政治述略』(生活・読書・新知三聯書店, 2014年修訂版) 第6章「概覽: 「祖宗之法」對於兩宋政治的影響——北宋中期到南宋後期」などを参照。
(52) 前掲註(50)黄寬重著書, 註(51) Robert Hymes 著書を参照。

(早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程)

ture should be regarded as the standard by which the *Leishu* from the Southern Dynasties were compiled; and was strongly influenced by the development of the art of annotation-commentary on the Jing, Shi and Ji genres from the Han Dynasty on. So it does not follow that the *Leishu* genre always presented comprehensive surveys of the all the Jing-Shi-Zi-Ji works from the start, but rather with both changing styles of erudition and historical consciousness, *Leishu* gradually came to cite works from a more and more diverse number of themes, topics and sources.

The author concludes that the *Leishu* compiled in the Southern Dynasties, were not convenient reference books for writing poems, but rather encyclopedias for understanding the worldviews of ancient literature, developing in close connection with the growth of scholarship, in general, and historical consciousness, in particular, from the Han Period on.

Reconsidering the Battle of Taiyuan in the Song-Jin Transition:
The Military Process during the Demise of the Northern Song Dynasty

Zou Di

The Jingkang 靖康 Incident marked the end of the Northern Song Dynasty (北宋), which was regarded as the watershed moment of the Song history. It also ushered in the beginning of the southward migration of northern ethnic groups. The Jingkang Incident has been regarded to embody the military weakness of the Song Dynasty. However, before the fall of the Northern Song, state governance was so stable that the Southern Song Dynasty (南宋) could be rebuilt immediately after its demise. This implies that the military power of the Northern Song Dynasty was not that insubstantial as discussed in the previous scholarship. This article defines the era between the Song-Jin war and the fall of the Northern Song as a “military process,” taking the battle of Taiyuan 太原 as a decisive moment. It mainly focuses on the international circumstance that the Northern Song faced, and discuss the complicated reasons of its destruction beyond the simple “military weakness” hypothesis.

The Northern Song’s miscalculation of the Jin military strategy resulted in the latter’s occupation of Taiyuan and the entire Shanxi 山西. The North-

ern Song seems to have vacillated between distinct policies, which led to its endless diplomatic compromises and expedient military strategies. However, beneath the surface, the Northern Song Dynasty was striving to balance the battle lines between Kaifeng 開封 and Taiyuan. During this “military process,” the correlation among decision makers in the central government, the military correspondence between Kaifeng and Taiyuan, and the frontier military operations materialized, with its resultant influence persisting into the Southern Song Era.

Having explored the “military process” during the fall of the Northern Song, this article concludes that the reason of its demise is far more complicated than the military weakness hypothesis. The influence of the international relations that the Northern Song faced should not be neglected. On the other hand, with the Jin army marching south, reconstruction of the nation’s defense line plays a vital role in the rebuilding of the Southern Song. Thus, research on the fall of the Northern Song can also prompt us to discuss the characteristic of the Southern Song regime.

The “Three-Anti Campaign” and the People of Northeast China

SUI Yi

During the early 1950s, the Communist Party of China launched the “Three-Anti Campaign” (“San-fan” Yundong 「三反」運動) against corruption, waste and bureaucratic red tape. This article is an attempt to trace the development process of the Movement, by focusing on the regional and geopolitical situation in northeastern China; then tries to clarify the actual mentalities and behavioral responses of the general public to the Movement, by taking up the case of how the people of northeast China tried to adapt to it.

It was in 1949 that there first appeared in northeast China activities intended to combat growing corruption within the CPC; but such direct action was prevented from evolving into a full-blown political movement by the necessity to expand production in response to the outbreak of the Korean War. Then in the summer of 1950, as the Korean War entered a stalemate, a movement to increase production through austerity (Zengchan Jieyue Yundong 增